Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-07-03

不幸な結婚は遺伝するのか？ : Life and Gabriellaに見る女性像の転換

種子田, 香

(Citation)
21世紀倫理創成研究,8:114-125

(Issue Date)
2015-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81009416

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009416

不幸な結婚は遺伝するのか？
—*Life and Gabriella* に見る女性像の転換

種子田　香

1．はじめに

1913 年に出版された『ヴァージニア』（*Virginia*）はエレン・グラスゴーの長編小説の中で自然主義文学の傾向の強い小説であり、中期の作品の中で高い評価を受けているが、その次に出版された『人生とガブリエラ』（*Life and Gabriella—The Story of a Woman's Courage*）はそれほど注目されてこなかった作品である。1916 年に出版されたこの作品にも『ヴァージニア』同様、環境決定論の影がヒロインを苦境に陥れているが、『ヴァージニア』に比べると全体的に明るい色調の小説に仕上がっている。その主な原因は、自由意思が決定論を覆そうとする、アメリカ的な自己信頼の息吹を感じることができるからであろう。ウェストブルックの指摘通り、グラスゴーは決定論をどのように受け入れられる形で自由意思と調和させるかということに苦心していた（Westbrook 162）。

19 世紀末から 20 世紀初頭のアメリカではダーウィンの『進化論』を直接社会に適用した社会進化論が広まっており、強者、社会に適合した者が勝ち残っていくのは、社会進化の当然の結果であり、富める者と貧しい者が生じるのも自然の摂理であるという考え方が広く浸透していた（猿谷 153）。このような資本主義が爛熟した時代に、グラスゴーのような人道主義的立場に立つ作家がダーウィニズムを取り入れながら敗者の苦しみに脚光を当てつつも、自由意思に軸足を移していったとしても不思議ではない。本稿では、グラスゴーがダーウィニズムをどのように『人生とガブリエラ』に取り入れているか、さらにこの作品中の決定論と自由意思の力関係に注目しつつ考察していきたい。

2．遺伝という呪縛

ヴァージニア州の田舎町でガブリエラ・カーは、父を早くに亡くした後、母や近所に住む姉らとつましい暮らしをしている。しかし、親戚から施しをうける生活を疎ましく思い始め、ガブリエラは経済的自立をすべく仕事に出る決断をする。

そういった彼女の思いは、「レディーらしくない」と非難され、周囲の人々から受け入れられず、結婚まで考えていたアーサー・ペイトンにも理解されない。このことからアーサーと溝ができ、別離を決心する。そのような時、ニューヨークから来たジョージ・ファウラーと出会い、恋に落ち、すぐに結婚する。新婚生活はジョージの両親が住むニューヨークで始まるが、ガブリエラはすぐにジョージはいい加減で、金銭面でも親に頼りっきりのわがままな性格だと気づく。子供が二人生まれた後も、ジョージには生活感がなく、ついにはガブリエラの知り合いの女性、フローリィと駆け落ちしてしまい、ガブリエラは 27 歳で離婚を余儀なくされる。その後の孤独な努力の末、ガブリエラは帽子屋の事業を成功させ、同じアパートの 1 階に住んでいる西部で事業を成功させたベン・オハラと出会い、38 歳で彼と共に生きていくことを決意するところで物語は終わっている。

前述の通り、この物語が描かれた時代にはダーウィニズムがアメリカで浸透していたため、小説の随所にその影響を見ることができる。まず、この小説で唯一、ダーウィンの名前が直接引用されている箇所を見てみたい。グラスゴーが古いタイプの南部人のことを、ダーウィンについて無理解であり文明に背を向けていると批判しているが、これはダーウィンを小説で登場させるときのグラスゴーの常套手段である。例えば、バッフィントンという南北戦争で活躍した老大佐のことを以下のように説明している。

> Social movements and the development of civilization interested him as little as did art or science—for which he entertained a chronic suspicion due to the indiscretions of Darwin. Change of any kind was repugnant to his deeper instincts, and of all changes the ones relating to the habits of women appeared to him to interfere most unwarrantably with the Creator's original plan（84）.

バッフィントン大佐は芸術や科学といった文明の発展には興味がなく、ダーウィンの進化論は軽はずみな考え方にすぎないと思っている。そればかりか彼の本能はいかなる変化も受け入れられず、特に女性の変化は最も神の教えに背くことだと考えていると、グラスゴーは皮肉を込めて述べている。彼は伝統という束縛から逃れることのできない古いタイプの人間であり、やがては淘汰され消えゆ

く運命にあることが暗示されている[1]。グラスゴーにとって、ダーウィンの進化論は、その人物が新しい価値観を受け入れられる柔軟性を持つ性質か否かを判断する試金石になっているのである。

ダーウィンの名前が直接言及されない場合でも、ダーウィニズム、またダーウィニズムから派生した社会ダーウィニズムの思想はこの小説の根底に流れている。何度も繰り返されるガブリエラの母親、カー夫人の嘆きの言葉は、それを例証している。

> "I am tempted to hope Gabriella will never marry. The Carrs all marry so badly!" Why had those words come back to her to-night? She had not remembered them for months, she had even forgotten that she had heard them, and now they floated to her as clearly as if they had been spoken aloud. (89)

カー家の人間は不幸な結婚をすることが運命づけられているので、ガブリエラには結婚してほしくないとカー夫人は叫ぶが、彼女にとってはそう信じるに足る証拠がいくつもあった。ガブリエラの兄、トムが結婚して６カ月後、彼の新妻が精神錯乱に陥った。また、ガブリエラの姉、ジョハンナは恋に破れて死んでしまった。さらに、二人目の姉、ジェーンもチャーリーという冷たい男と結婚したストレスから喘息の発作を頻発し、命の危機に直面することさえあった。このような身内におこる不幸を、カー夫人はカー家の遺伝的な弱さと考えるようになった。そして、カー夫人の呪文のような嘆きを毎日聞かされて育った娘、ガブリエラはその影響を強く受け、ジョージと結婚した後でさえも常に母の言葉が彼女の脳裏をよぎった。

> Remembering Jane, remembering the hereditary weakness of the Carrs, who had all married badly, she [Gabriella] told herself that in hardness lay her solitary refuge from despair. After all, it was better to be hard than to break. (100)

カー家には遺伝的に弱い性質が受け継がれており、そのために一族の者は結婚

生活がうまくいかない運命を背負っている。その絶望から逃れるには感情を持たないことだとガブリエラは自分に言い聞かせる。ジョージとの間に二人の子供を産んだガブリエラであったが、夫との関係はますます冷え込み、夫は他の女性と遊び歩いて、酒に酔って深夜に帰宅することが多くなった。このような娘夫婦を見て、カー夫人の嘆きは続く。

> Yes, the Carrs had all married badly, reflected Mrs. Carr, with the grief of a mother and the pride of a philosopher whose favorite theory has been substantially verified—every one of them, with, of course, the solitary exception of poor Gabriel himself. (121)

不幸な結婚はカー家の遺伝的な弱さに起因するものなので、血縁者はこの呪縛から逃れることのできない定めを背負っているとカー夫人は考えるが、この運命論を受け入れることは、カー夫人にとってある意味、精神的な救済になっていた。カー夫人が母親として子供達の人生に責任があるが、その責任を果たすことができなかったという自責の念を持たずに済むばかりでなく、自分もまた運命の犠牲者という立場に逃げ込むことができたからである。

彼女がこのように考える背景には、人間は体格や容姿だけではなく、考え方や価値観までも遺伝によって先祖から受け継がれていっているというダーウィニズムから派生した考え方があった。オスカー・ワイルドが「想像力というのは遺伝の産物なんだ」（富山 153）と語っているが、想像力といった個人的能力と思われることでさえ、祖先の経験が伝達されてできたものであると考えられるほど、欧米でのダーウィニズムの影響力は広範囲に及んでいた。イギリスで「想像力を遺伝の問題としてとらえるということは決して奇異ではなかった」（富山 154）というほど、生理学的な心身一元論が力を得ていた。遺伝によって人間の容姿だけでなく、想像力や運命までもが決定されていると考えられていた時代には、不幸な結婚を招く弱い性質が遺伝しているという考え方にも十分に信憑性があったのである。

3．生来性犯罪者説の影響

身体と精神の相関関係を探るべく、19 世紀前半の学者たちは、フランソワ＝

ジョセフ・ガルの骨相学をきっかけにして、歴史的人物の頭蓋骨を様々な角度から測定し、数多くの脳髄を蒐集し、重さを測った。また、犯罪者になりうる性向までが遺伝的に決定されているというイタリアのチェーザレ・ロンブローゾによる生来性犯罪者説も 19 世紀末に盛んに議論されていた（ダルモン 1 - 4）。このように、生物学的な決定論が個人の努力など後天的要素よりも重要視される傾向にあった時代の根源には、ダーウィンの進化論があり、その汎用性の高さからあらゆる方面に重大な影響力を与えていたのである。

さらには、グラスゴーも容姿がその人物の内面を表すという心身一元論的考え方を小説に取り込んでおり、『人生とガブリエラ』に登場する初老の男性、クロウボロー判事（Judge Crowborough）を次のように描写している。

> He was a tall, florid man with an immense paunch flattened by artificial devices, and a vitality so excessive that it overflowed in numberless directions—in his hearty animal appetites, in his love of sports, in his delight in the theatre and literature, particularly in novels of the sentimental and romantic school, in his fondness for the lighter operas, and in his irrepressible admiration for pretty women. His face, large, ruddy, with a hooked nose, where the red was thickly veined with purple, and protruding lips over square yellow teeth that gripped like the teeth of a bulldog, aroused in Gabriella a quick repulsion which only the genial humour of his smile overcame. (86)

赤紫の鉤鼻、黄色いブルドッグのような歯が並んだ顔面で、その内面も動物的で肉体的欲望が強いが、愛想の良いユーモアのある人物として描かれている。彼の外見描写から、グラスゴーはどういう性格を物語ろうとしたのであろうか。ロンブローゾの生来性犯罪者説から見ると、曲がった鼻は犯罪者に多くみられる傾向であり、容姿の醜さは性格的な欠陥を表していると考えられた（ダルモン 113）が、同時に、人懐こい笑顔によってその欠点が補われている。『人生とガブリエラ』のこの後の展開で、クロウボロー判事は資金援助する見返りをガブリエラに求めるが、ガブリエラは彼の手を振り払って申し出を断ることになる。動物的な欲望の強い人物ながらも、困っている人を助けようという善意も併せ持つ性

格ということであろうか。このように、クロウボロー判事の描写自体が、物語の展開を予兆する伏線の役割を果たしている。

ロンブローゾは、自分の論が小説の分野にインスピレーションを与えていて、バルザック、ドーテ、ゾラ、ドストエフスキー、イプセンも犯罪者の性格を描くにあたって生来性犯罪者説を取り入れていると書いている（ダルモン 94）。また、自然主義文学の定義者と考えられているフランス人作家、エミール・ゾラはロンブローゾの『犯罪的人間』を 1888 年頃に参照しており（ゾラ 494）、1890 年に出版された『獣人』の主人公、ジャック・ランチエは、ロンブローゾの生来性犯罪者論から抜け出したように見えるとダルモンは述べている（95,96）。ランチエは顎が大きく顔色は死人のように蒼ざめ髪はふさふさとした巻き毛で、重い遺伝病を患い、浴びるように酒を飲み、熱と激しい頭痛に苦しんでおり、記憶喪失と癲癇性のめまいをおこしやすい体質である（ダルモン 96）。つまり、隔世遺伝の結果、殺人者になるべき運命を背負って生まれてきた人物として描かれている。

さらにダルモンはこれらの生来性犯罪者のことを、「人間と獣との恐るべき雑種、……犯罪を犯す傾向や流血を好む反社会的本能をもっているが、それは動物の遺伝的特性を避けられなかった先祖の不完全な身体の記憶と名残からくるもの」（ダルモン 62）と定義されていると指摘しており、動物から人間への進化がうまくいかなかった否定的な例として見なしている。

否定的な性格が受け継がれていく例として、『人生とガブリエラ』ではガブリエラの夫、ジョージと駆け落ちしたフローリィ（Florrie）をあげることができるであろう。ゾラの『獣人』にはフロール（Flore）という似た名前の踏切番の娘が登場するが、それぞれの小説で与えられた役割は全く異なる。フローリィは母親から野卑な性格を、身体的には母親の赤毛を受け継いでおり、ジャック・ランチエほど強烈ではないが、動物から人間への進化が失敗した例として描かれている。19 世紀末の人体測定学のあるデータでは、赤毛の犯罪者の中では泥棒の割合が 71.42% であるが（ダルモン 85）、次々に妻子ある男性と駆け落ちするフローリィが赤毛と設定されているのには、このような時代的背景によるものである。

> …she could not deny that Florrie was vulgar. As a matter of fact, Florrie's mother had been vulgar before her, and the thin strain of refinement inherited from her father's stock had obviously been overborne by the

torrential vulgarity of the maternal blood. (125)

フローリィの父方の優れた血は母方の野卑な血によって打ち消されてしまったと考えられ、フローリィは悪女になる傾向を母親から生来的に受け継いでいたのである。フローリィと一緒に駆け落ちした元夫、ジョージは、結局、戻る家もなくなり、街をさまよい歩き、惨めな状態でガブリエラに庇護を求めて死んでいったのに対し、フローリィは若々しいまま、次々に違う男性と付き合う。これは、ジョージが後天的に不道徳な性質を身に付けた一方、フローリィは悪事を恥じることができないほどに生まれつき病的な性格であることを暗示している。

Tradition was not always the mirror of life. For in this one case at least, the man, not the woman, had been the victim of natural law, and Florrie, fool though she was, had shown herself at the hour of requital to be stronger than fate. (268)

夫であったジョージが自然の掟で淘汰されてしまったのにもかかわらず、フローリィは何の報いも受けず、若々しく美しいまま、再びガブリエラの前に現れ、ガブリエラはやり切れない思いをする。このフローリィの悪気なさもロンブローゾの生来性犯罪者説に適合している。フローリィのように、遺伝的に病的性格が受け継がれた人々は「一種の無感覚状態で生きている」(ダルモン 58) と考えられ、当時、ロンブローゾは犯罪者の感動性の欠如を数値で確かめる実験を熱心に行っていた。

つまり、ジョージがアルコール中毒に苦しみ、雨でずぶ濡れになって街をさまよい歩いた揚句、肺炎で惨めに死んでいったのは、彼に人間的な良心が宿っていたからであり、心の弱さのために転落の人生を送ってしまったとはいえ、悔悛の余地のある人物であったということである。それに対しフローリィは欲望のままに振る舞い、それを反省し後悔する能力に欠けていて、人間への進化が不成功に行われた例として描かれた人物であり、先祖が動物であったころからの獣性が未だに強く残っている人物であるということであろう。

4．ナショナリズムの萌芽

ジョージとの死別を乗り越え、ガブリエラは最初の恋人、アーサーと人生を共に過ごしていればどうなっていただろうと思いを巡らせる。彼と一緒ならヴァージニアで心穏やかに過ごせたに違いないと思い、18 年ぶりにアーサーと対面する決意をする。優しくて穏やかなアーサーを思い出す時、ガブリエラは常にヒヤシンスの香りに包まれている。甘い花の香りはアーサーの面影と一体化し、彼との思い出はますます美化されていった。

> Only on soft spring days, coming home in the dusk, she would sometimes pass carts filled with hyacinths, and in a wave the memory of Arthur and of her first love would rush over her. (162)

ヒヤシンスはギリシア神話の美青年、ヒュアキントスの血から生じたと伝えられ、芳しい花をつける植物であり、花言葉が「悲しみを超えた愛」となっていて、アーサーとの愛の展開を暗示している。久しぶりにアーサーと二人の時間を過ごしたガブリエラは、初恋の思いは今となっては友愛に変わっていたことに気付き、過去の思い出に決別し、未来へと一歩踏み出すことになる。

結局、ガブリエラがこれからの人生を共に生きていこうと決める相手は、西部で事業を成功させたベン・オハラである。カリフォルニアで金鉱が発見された後、1869 年には最初の大陸横断鉄道が開通し、1890 年の国勢調査でフロンティアは消滅したと宣言されるといったように、西部には一攫千金を狙って大勢の人々が詰めかけていた（猿谷 144）。オハラもその中の一人であり、鉱山と鉄道で成功した後、裕福な生活をニューヨークで送っている。彼は、“He embodied the triumphs and the failures of American democracy (262)” と語られる通り、アメリカ民主主義の光と影と体現者である。貧しい移民の子が一代で成功を成し遂げるというアメリカン・ドリームを実現させる一方、両親と早く死に別れ、家族に恵まれず孤独と闘ってきたという点で競争社会の犠牲者という一面も併せ持つ。

鉄道というモチーフは、ゾラの『獣人』の中でもまるで生きた動物のように躍動感を伴って描かれているが、科学技術の粋を集めて建設された鉄道は人間の知性が自然を支配しようという試みを象徴しており、当時の作家達のインスピレーションを刺激したのであろう。『人生とガブリエラ』では、鉄道事業成功の一角

をオハラが担ってきたことは、彼の度胸の良さや知性、また西部という荒々しい土地で頭角を現すことができる生命力の強さを物語っている。“Now for pure constructive imagination the North and South don't hold a candle—they simply don't hold a candle—to the West. (86)” とクロウボロー判事も認めるほど、西部は今や、北部や南部がとても及ばないほどの発展を遂げている。これは、北部で成長したジョージ、南部人のアーサーを押しのけ、西部で成功したベン・オハラがやがてガブリエラの心を掴むという伏線と読める。適者生存の社会ダーウィニズムの競争で、オハラは、ひいては西部は、生き残ることができたアメリカの成功者を具現化しているのである。

ベン・オハラは貧しいアイルランド系の移民の子として地下室で生まれ落ち、両親とも早くに死に別れ、幼いころから独力で生きてきた。一旗揚げようと西部へ行って成功したが、そこで知り合って結婚した女性はモルヒネ中毒であるとわかった。彼女を気の毒に思い、別れることができず、不幸な結婚生活は 18 年続いた。この女性は精神錯乱状態で入院を余儀なくされ、オハラが長年面倒を見て最期を見取ったという経緯があった。ガブリエラが出会った時にはすでにその妻は他界していたが、この妻はルーツを捨てて人々が集まる西部という混沌とした雰囲気、得体の知れない他者に対する恐怖を表しているのではないだろうか。オハラの妻の出生は謎めいており、西部という欲望がひしめき合う場所が孕む危険な落とし穴の暗喩と思われる。「彼女に落ち度はない。ただ弱かっただけだ」(248) と語るオハラであるが、そこから見えてくるのは、強い肉食獣がジャングルで小型動物を食い殺すように、オハラの妻は気の弱さに付け込まれて蹂躙されてしまった競争社会アメリカの犠牲者であるということ、さらには西部にうごめく欲望から生まれた正体不明の他者への恐怖を彼女が具現化しているということだ。

こういった競争社会の犠牲者にならないように強くなろうと、ガブリエラは繰り返し自分に言い聞かせる。その甲斐あってか、彼女は努力と才覚によって事業で成功していく。「楽な人生は送ってこなかった。でも生活していくのが好きなの」(177) とガブリエラが話すと、子供たちの病気を診てくれるフレンチ医師は、ガブリエラを次のように評する。

> “It is the true American spirit—optimism springing out of a struggle. Do you know you have always made me think of the American spirit at its

best—of its unquenchable youth, its gallantry, its self-reliance--”（177）

競争から生まれた楽観主義、それがアメリカ人の本当の精神で、その最良の形をガブリエラが表象していると語られているが、この発話は作者がガブリエラをどのように描きたかったかを如実に物語っているであろう。永遠の若さ、勇敢さ、自己信頼といった言葉は、ガブリエラの性格的特徴であるばかりでなく、アメリカという国家そのものがスローガンに掲げている資質である。「私は幸せになりたいし、そうなる権利がある。でも幸せになるかどうかは私次第なのよ」（181）という自己信頼を前面に押し出してくる小説の後半では、ガブリエラの成功物語という枠を超えて、アメリカという国家の精神の健全性が称賛され、20 世紀初頭のナショナリズムの台頭が映し出されているのである。

5．おわりに

『ヴァージニア』の出版年と『人生とガブリエラ』が出版された年の間で第一次世界大戦が勃発したという歴史的背景も、グラスゴーの小説が自由意思に傾いていった理由であろう。1914 年にヨーロッパで第一次大戦が始まると、アメリカは連合国側の兵器庫としての役割を果たし、国内の経済は戦争ブームで好況を続けることができた（猿谷 176）。ゾラの『獣人』では、フランス軍が普仏戦争に向かい、大敗を記すことになるが、その破壊的世界へ突入する不気味さが漂う。一方、『人生とガブリエラ』ではアメリカに繁栄をもたらす大戦が背景にあることで、明るい雰囲気が映し出されている。両者ともに戦争という背景を小説に埋め込んだ点では同じであるが、もたらされた結果に伴って、それぞれの効果は全く対照的になっている。この大戦でアメリカの企業は莫大な利益をあげ、国力が飛躍的に伸び、国民も経済的繁栄を享受するようになる。また、他国との戦争によって国際的な視野が広がり、南部人、北部人などという国内の地域的気質よりも、アメリカ人としてのアイデンティティーが国民の中に強く意識されるようになったと思われる。第一次大戦によってアメリカが世界の覇者として頭角を現していく時代の国民的高揚感が、グラスゴーの『人生とガブリエラ』には顕著に反映されている。また、この高揚感は、人生は努力でより良いものにすることができるといった自己信頼へと繋がっている。

『人生とガブリエラ』は、グラスゴーが愛読していた『ジェーン・エア』と同

タイプの恋愛小説であり[2]、どの男性と結婚するかということが最大のテーマとなっているが、グラスゴーのユニークさは、一度結婚に失敗した二人の子持ちのヒロインが再婚相手を見つけるまでを描いた点にある。相当な長さの紆余曲折を経て、数多くの失敗を乗り越え、それでも貪欲に幸せを勝ち取っていくヒロイン、ガブリエラには『ヴァージニア』には無かった痛快さを感じることができる。19 世紀の感傷小説では、ヒロインが誘惑されて捨てられた後、自殺などといったヒロインの死で物語が終わることが多いが、ガブリエラは一人になった後も、力強く苦難を生き抜き、大勢いる再婚候補者の中から吟味を重ねて相手を選ぶ。夫が他の女性と駆け落ちして離婚した後、ワーキングマザーとして子供達を立派に育て上げ、帽子屋の事業を成功させることによって自己信頼を確立させ、中年にさしかかっても新たな人生のパートナーを選択していく姿には、翻訳家の鴻巣友季子が世界文学史上最強の「肉食女子」と呼ぶ『風と共に去りぬ』のスカーレット・オハラへと続くヒロイン像の萌芽を見ることができる（鴻巣 16）。ダーウィニズムを援用した自然主義的決定論を小説の背景に取り入れつつも、不幸な結婚を乗り越えていく力強いヒロインを描ききったことで、グラスゴーが創作手法を決定論に支配されるヒロイン像から、自由意志でたくましく生き伸びていく女性像へと大きく舵を切った足跡が、『人生とガブリエラ』には明白に表れているのである。

註

※本稿は、神戸英米文学会年次大会（2014 年 3 月 10 日、於神戸大学）での口頭発表原稿に加筆・修正したものである。

（1）現在でも約半数のアメリカ人は進化論を否定しているという世論調査の結果がある（入江 232）。グラスゴー家は長老会派のクリスチャンであり、父親は進化論を決して認めなかった。グラスゴーは父親と意見の対立を繰り返している。進化論を作品に取り入れることは、父親に対する挑戦でもあった。

（2）*The Woman Within* x

引用文献

Bronte, Charlotte. *Jane Eyre*. 1847. Ed. Richard J. Dunn. New York: Norton, 2001.

Glasgow, Ellen. *Life and Gabriella—The Story of a Woman's Courage*. 1916. Qontro

Classic Books, 2010.
---.The *Woman Within: An Autobiography.* 1954. Charlotteville: UP of Virginia, 1994.
Westbrook, Perry D. *Free Will and Determinism in American Literature.* Rutherford: Fairleigh Dickinson UP, 1979.
入江重吉『ダーウィンと進化思想　人間論からのアプローチ』（昭和堂　2010 年）
鴻巣友季子「ヒロインで読む世界文学 4 」『日本経済新聞』,（2013 年 4 月 25 日夕刊）, 16.
猿谷要『検証　アメリカ 500 年の物語』（平凡社　2004）
ゾラ、エミール「獣人」『世界文学全集 29 ゾラ／モーパッサン集』河内清、倉智恒夫訳（筑摩書房　1970）
ダルモン、ピエール『医者と殺人者―ロンブローゾと生来性犯罪学者伝説』鈴木秀治訳（新評論　1992）
富山太佳夫『ダーウィンの世紀末』（青土社　1995）

（神戸大学大学院人文学研究科・博士課程後期課程）